

2004年10月4日 建築が竣工

去る10月4日、三井・東芝館の建築本体工事が完成いたしました。

三井・東芝館は企業パビリオンゾーンBに位置し、高さ23メートル、建築面積2,000平方メートル、地上2階建て。現在、展示・システム工事に入っています。



パビリオン建築は、「感じる地球」をコンセプトに、出展テーマである「地球 生命(いのち)の輝き」を体験、想起していただくよう、水・光・風などのアースエレメントを取り入れ、地球の生命が織り成す躍動感を表現しています。

【特 徴】

(1) 水に覆われたパビリオン

アースエレメントの中でもとくに「水」をメインのモチーフとして、高さ16mの 屋根部分までポンプで汲み上げた水をパビリオン前面のルーバーをつたわせるように流し、4.5mの高さから水盤に流れ落ちる仕組みの アクア・ウォールにより、清涼感を高めるなど来館者に快適な空間を提供します。

(2) 自然エネルギーを活用したパビリオン

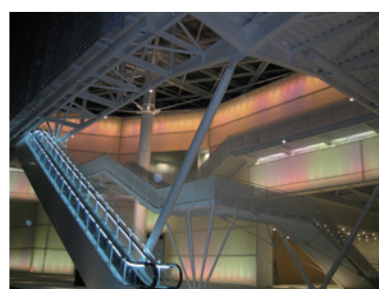
アクア・ウォールに加え、自然通風、自然採光などの自然エネルギーを最大限に利用した設計を採用しています。

(3) ドラマ性のある動線で構成されたパビリオン

水の壁に飛び込むようなファサードから、エスカレーターで上昇、そして空中回廊など、動線のシーケンスがドラマチックに変化する構成となっています。

【面 積】

敷地面積：3,000平方メートル、建築面積：2,000平方メートル





アクアウォール

「最近東京都の中での打ち水運動があり、都市の気温を下げるのに効果があるということが証明されたという報道がありました。こうした過去の叡知をもう一度違う形に昇華させたのが、館全体を覆うアクアウォールです。愛知万博が開催される期間中の3月から9月という日本の亜熱帯性がもっとも顕著になる期間にこのアクアウォールは、打ち水効果を最大限に発揮します。」



落下する水

「高さ16メートルから、建設の仮設材である足場用単管で構成された幅150メートルの壁を水が伝わって落下して、この効果を館内で待つ人々に与えることになります。壁材は仮設材ですので、会期が終わると回収されます。周りは水盤で囲まれていて、その上を通る風はやはり涼風を館内に運びます。このように館の中の待ち空間を、半外部化することによって、空調範囲をシアター部分だけに限り、最小限にしています。」



構造柱

「全体を覆う屋根は吊り構造に3本の柱だけで支えられています。これは最も鋼材量が少ない構造です。これもこれまでのような圧縮に対抗して踏ん張る構造ではなく、傘のように吊り構造にすることによって、軽量化が実現されています。」



オーロラウォール

「内部空間のシアターを囲む壁は、オーロラウォールといって、光の演出がなされ、シアターに入る前の高揚感を演出すると同時に、夜間には館をライトアップすることになり、館の魅力を増加することになります。」

プランテック総合計画事務所 大江匡（談）



■ 設計者

大江 匡（おおえ ただし）

1954年、大阪府生まれ。建築家。東京大学大学院工学建築研究科修了。
77年菊竹清訓建築設計事務所に入所。
85年プランテック総合計画事務所を設立。
94年「ファンハウス」で日本建築家協会新人賞を受賞。
99年第40回建築業協会賞「細見美術館」受賞。
01年グッドデザイン賞「横浜の茶室」受賞、その他各賞に輝く。